

# 絵本が乳幼児の成長に与える影響

## 0歳児～5歳児までの発達を踏まえて

古川 礼子

### 抄録：

園生活には、一人ひとりの発達や興味・関心に応じた絵本コーナーが身近にあり、子どもが自ら手を伸ばし、ページをめくったり絵を見たりして、主体的に絵本と関われる環境が工夫されている。日々の生活の中で、情緒が安定しない子どもや表現が苦手な子どもが、絵本との出会いや読み聞かせをきっかけに成長がみられることがある。絵本に出てくる言葉や内容をまねて遊んだり、基本的生活習慣の獲得なども絵本の影響を受けたりする。また、絵本との出会いは、子どもが豊かな言葉を獲得するうえでも大きな影響を与える。

本研究では、園生活の中で、子どもが主体的に絵本と関わる姿を通して、絵本の魅力や役割、重要性、発語が、子どもの成長（言葉の獲得）にどのような影響を及ぼすのかについて、事例と考察を通して紹介し、絵本との関わりをより効果的に子どもたちの成長につなげるためにはどのような配慮が必要か考察をしていく。

キーワード：絵本、言葉、読み聞かせ

### I 乳幼児教育の重要性

- ① 教育基本法における「幼児期の教育」の位置付けとして第11条に「幼児期の教育は生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであることにかんがみ、国及び地方公共団体は幼児の健やかな成長に資する良好な環境の整備その他適当な方法によってその振興に努めなければならない」とある。重要性が位置付けられたことで幼児期の教育を保障する必要性が議論されてきた。
- ② この時期は、スキヤモンの発達・発育曲線を参照すると、神経系の発達が著しい年代でもあり、さまざまな神経回路が形成されていく大切な過程となる。神経系は、一度その経路ができあがるとなかなか消えない特徴があり、乳幼児期に、神経回路に刺激を与えることが将来的に大きな成長が期待される。このことから乳幼児の体験や環境は、将来の学習や行動に大きな影響を与えることが研究成果からも指摘された。

### II 乳幼児教育の重要性への認識の高まり

- ① 乳幼児期の重要性が位置付けられたことにより、その教育を保障する必要性も議論されてきた。乳幼児期ふさわしい経験をすることが、その後の成長と発達を促し、一人ひとりの子どもが持つ可能性を最大限に引き出す方向へと導くこととなる。

- ② 乳幼児教育の独自性や重要性に関する認識の広まりによって、園が子育て支援や就労支援の観点からだけでなく、子どもの育ちや学びの権利を保障する観点から運営され、すべての子どもに対して保育専門職による施設保育を提供することの重要性が高まった。
- ③ 近年、幼児期の語彙数がその後の学力に大きな影響を及ぼすことや、小学校の低学年のうちに、語彙量を増やすことが、その後の学習に極めて大きな影響を与えることが研究から明らかにされている。このことから幼児教育の専門職が絵本研究をすることは重要となる。

### Ⅲ 領域「言葉」のねらいと内容・内容の取扱いの観点から

平成 30 年に改訂された保育所保育指針と幼保連携型認定こども園教育・保育要領には、乳児と 3 歳未満児の保育の内容が追記された。乳児期の保育の重要性に鑑み、子どもの育ちと学びの過程を乳児期から丁寧に捉える視点が重視された。

- ① 第 2 章第 4 節の満 3 歳児以上の園児の教育及び保育に関するねらい及び内容の「言葉」の領域では、「経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現にし、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う」とある。
- ② ねらい(3)「日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ言葉に対する感覚を豊かにし、保育教諭や友達と心を通わせる。」とあり、「言葉に対する感覚を豊かにし」が新たに加えられた。
- ③ 内容の取扱い(4)「園児が生活の中で言葉の響きやリズム、新しい言葉や表現などに触れこれらを使う楽しさを味わえるようにすることである。その際、絵本や物語に親しんだり言葉遊びなどをしたりすることを通して言葉が豊かになるようにすること」が②と関わって新設された。
- ④ 言葉に対する感覚とは、そのものの響きやリズムに過敏になることである。言葉の微妙なニュアンスや、相手や場に応じた言い方に気づくことでもある。言葉そのものに対する興味を促し、言葉の楽しさや面白さを絵本や言葉遊びを通して感じられるようにすることが改訂で求められている。
- ⑤ 内容の(9)に「絵本や物語などに親しみ、興味をもって聞き、想像する楽しさを味わう」と示され、内容の取扱い(3)には「絵本や物語などでその内容を自分の経験と結び付けたり想像を巡らせたりするなど、楽しみを十分に味わうことによって、次第に豊かなイメージをもち、言葉に対する感覚が養われるようにすること」と明記された。

### Ⅳ 絵本と言葉のつながり

- ① 赤ちゃんは、胎児のころから耳にしている身近な大人の声に反応し、泣いていた子が泣き止んだり、微笑みを浮かべたり、声を出したりする姿が見られる。身近な大人が赤ちゃん向けの絵本を見せて繰り返し読んであげること、音のリズムや韻音を通じて言語につながるための環境となる。
- ② 乳児期の言葉には、物の形や現象を表現するために発声する響きやリズムがある。「じゃあじゃあ」「びゅうびゅう」「ころころ」など繰り返し声に出しながら同じページで同じ音を発声し、読み手や同じ場にいる子どもと共有することにつながる。
- ③ 幼児組の遊びを見ていると、ぶらんこに乗りながら「ゆーらゆーら」と身体で感じた感覚をそのまま絵本を見ながら自分の言葉で表現したり、かえるやうさぎが跳び跳ねている絵を見ると「ぴょんぴょん」と絵を読みとって表現したりする。言葉があると友達や保育者とつながり、より楽しく活動する

姿が見られる。

## V 子どもの生活の中での絵本の役割

絵本は、乳幼児期の子どもたちにとって、言葉の基礎を学び、豊かな想像力や理解力を育むための貴重な教材である。また、絵本には多様なストーリーや登場人物、動物、植物、キャラクターが登場し、子どもの心をわくわくさせたり、興味や関心をひきつけたりする。

また、登場する人物が困った時に立ち向かう姿勢や友達の優しさに触れる場面など絵本からの疑似体験として多くのことをイメージしながら学び、感情表現や倫理観の形成にも重要な役割を果たしている。幼児期になると、集団の中で、生活や遊び営むために、自分の思いや考えを相手に表現しないと困る場面に多く遭遇する。例えば、ぶらんこに乗りたいが、変わってもらえない場面がある。そんな時、困っている内容を訴える手段として言葉が必要である。子どもは、自分のおかれている状況において、相手に伝える必要性を感じ、過去の経験や、絵本のシーンで心に残っている言葉を使って課題を解決していこうとする。絵本や経験は、子どもの言葉の引き出しの一部として、必要な時に主体的に使える力をつけることが大切になる。また、相手や場に応じた使い方に気付きながら言葉を獲得している。同時に、絵本や言葉遊びから、言葉の楽しさや面白さなどを感じ取って、記憶と結び付け、言葉の引き出しに閉まっている。

## VI 読み聞かせの必要性和重要性

読み聞かせは、子どもに絵本の楽しさや感動を知ってもらうための貴重な機会である。子どもに十分な愛情をもった保護者や保育者が、心を込めて絵本を読み聞かせることで言語能力の向上やコミュニケーションスキルの発達が促進される。また、読み聞かせは親子や保育者と子どもの絆を深めるチャンスや機会でもある。愛情と深い関心を持って絵本を共有することは子どもの心の成長に不可欠である。

読み聞かせを通じて子どもたちは安心感を得て、そこに自己肯定感や自尊感情を高めることができる。

## VII 子どものつぶやきの意義

つぶやきは、子どもの内面や感情を理解するために、重要な手掛かりとなる。言葉や行動だけではなく、子どもの表情や仕草、発声からも心理状態や家庭の背景を読みとることが出来る。子どものつぶやきは、喜びや興味を理解するのに役立つだけでなく、抱えている不安や悲しみ等の早期発見につながられる。保育者や養育者は子どもたちのつぶやきに耳を傾け、子どもが身の回りの世界について考え、表現する機会を提供することが重要である。

## VIII 読み聞かせの中での事例と考察

### 事例1 『じゃあじゃあびりびり』赤ちゃん絵本 まついのりこ 作 偕成社

#### ① 入園当時のA児の姿

A児は6ヶ月で入園し、慣らし保育2週間は11時降園。母乳のため哺乳瓶がうまく使えず泣き方が激しい。担当保育者は、室温湿度を整え、おむつ交換をしたり、園で飼っている金魚を見せたりして過ごした。はじめは泣いていたA児も、慣らし保育を終えるころには、音の出るおもちゃで遊んだり、赤ちゃん絵本を読んでもらったりしながら機嫌よく過ごせる時間が増えてきた。

## ② A児の変容

担当保育者は、赤ちゃん絵本『じゃあじゃあびりびり』をA児に読み聞かせをした。同じ音を繰り返すとA児は声に出して笑うようになり、手足をバタバタ動かしていた。次の言葉を待っているかのように、保育者の口元を見たり、絵を叩いたりする姿が見られた。

## ③ 考察

絵本を読み聞かせをする中で、子どもの反応がはっきりわかりやすく応答性が感じられた。担当保育者との愛着関係が深まり情緒が安定してきた。仕事で忙しくされているA児の母親が「先生！A児に絵本を読んでいると私も楽しくなってきたわ」と感想やA児の様子を話してくれた。絵本デビューは親子の愛着形成にもつながった。

## ④ 絵本が持つ特徴

- ・赤ちゃんが好きな擬音語  
たくさんのおノマトペ「じゃあじゃあ」「かんかん」「びりびり」擬音は直接赤ちゃんの感性に訴える。
- ・文字の配置の工夫  
赤ちゃんにとっては文字も絵の一部と捉え、動きが感じられる配置になっている。
- ・角・丸（形・素材）  
投げたりかじったりしても安心な素材
- ・赤ちゃんの肩幅と同じ大きさ（視野と同じ）  
絵本の大きさが赤ちゃんの視野と同じくらいになっている。  
手を伸ばして絵が見える。大きさもちやすい。見やすい。
- ・認識しやすくはっきりした色・形  
発達のまだ視野がぼんやりしている時期のため。
- ・ページをとばしたり戻ったりしても大丈夫  
ストーリーがないため順番に見なくてもどのページでも新鮮な出会いがある。  
ページ毎に違う絵が登場するため、お気に入りページができる。

## 事例2 『きんぎょがにげた』 五味太郎 作 福音館書店

### ① 表情が乏しい1歳9ヶ月 入園当初のB児の姿

歩行が確立し、給食もスプーンやフォークを持って自分で食べようとする姿が見られる。出来ることも増えてきたB児であったが、保育者が認めたり褒めたりする中でも、表情が乏しく緊張が高い姿があった。

### ② B児の変容

保育室の絵本コーナーからB児が担当保育者に『きんぎょがにげた』の絵本を持ってきた。「あれ？きんぎょがにげたね」「きんぎょさんどこかな」とたずねると指を差した。「ピンポーン」「きんぎょさんいたね」とB児を抱きしめると、保育者に寄りかかり嬉しい表情を見せた。絵本をめくると、きんぎょが隠れている場所を自分から指差し「ピンポーン」と声が出せた。保育者の「ピンポーン」の声と『グー』の抱っこを待っていた。

母親にB児の姿を連絡すると、家庭にも同じ絵本があり、よく父親に読んでもらっていることが分かった。

た。

### ③ 考察

B児は、言葉のリズムや響きを楽しむことで表情も柔らかくなってきた。絵本の読み聞かせを通して、保育者との関係も深まり、安心して自分を出せる存在になった。学びの過程を乳児期から丁寧に捉え、環境に取り入れる視点を持つことが大切であると感じた。

## 事例3 『いやだいやだ』 せなけいこ 作・絵 福音館書店

### ① 友達に手が出る2歳10ヶ月 C児の姿

C児は外遊びが大好きで、砂遊びや坂道の上り下りを繰り返している。話せる言葉も増えてきたが、自己主張が激しく衝動的に友達に手が出てしまうことがある。身近な大人の意図がわかるようになり、毎日の生活の中で、排泄や着替え、食事など切り替えがむづかしい姿がある。

### ② C児の変容

「るちゃんは どうする」の問いかけをC児に置き換え「C児はどうしたいの？」と聞くと「〇〇したい」と簡単な言葉で思いを話す姿が見られた。C児の思いを聞き、「〇〇したかったね」と共感することで、徐々に衝動性が収まってきた。

### ③ 考察

いやいや期は、誰もが通る成長の過程であることを踏まえ、保護者や保育者の意図する方向に変えようとするのではなく、「いやだったね」とまず、C児の気持ちに寄り添う姿勢を大切にしたい。保護者とも連携を密に行いながら、家庭でも同じ対応をしたことでC児の心が動いた。

また、この時期は保育者が仲立ちとなり、簡単な言葉を使って友達ともコミュニケーションが図れるよう関わり方の援助が重要である。絵本の一コマを保育に取り入れ、丁寧に関わったことでC児はいやいや期を乗り越える成長につながった。

## 事例4 『おおかみと7ひきのこやぎ』 原作グリム いもとようこ 文・絵 金の星社

### ① 先生を一人じめしたい 3歳11ヶ月 D児の姿

言葉が豊かになり、「なんで」が口癖になっているD児。短時部で園に通うようになり、慣れない集団生活の中で、遊び相手は担任の先生となり、友達への関心や遊びの広がりが見られずに保育者を求めてくる姿が続いた。

### ② D児の変容

まず、担任を求めてくるD児に丁寧に関わって応答したことで「先生のお話が終わったら、次はD児のお話を聞くね」と簡単なルールが分かるようになってきた。お話遊びでは、大好きなおおかみ役になり「とんとんとんおかあさんだよ」「とんとんとんおおかみだよ」と、リズムを刻む一節を友達と繰り返し発する中で、自然と友達とのかかわりが増え、楽しさを共有することができるようになった。絵本から発展した劇化や、リズムを刻むお話し遊びの活動が、友達への関心や遊びの広がりにつながったようである。「とんとんとんおかあさんだよ」「とんとんとんおおかみだよ」はクラスの共通言語となり、仲間意識が芽生え、同じ役の友達とイメージを膨らませて楽しむことができた。

### ③ 考察

『おおかみと7ひきのこやぎ』の絵本は、いろいろな種類が出版されている。担任は3歳児の発達や興味に合わせ、いもとようこ絵・文の絵本を選択した。ふんわりと優しい絵が描かれた絵本だったことから、D児は自分からおおかみ役になりたいと決めた。繰り返しの言葉「とんとんとん おおかみだよ」が、ク

ラスの中でも共通言語となり、仲間意識が芽生えた。D児は『おおかみと7ひきのこやぎ』の絵本が大好きになり、読み聞かせのリクエストが続いた。お面をつけることでより役になりきる姿があり、同じ役の友達同士でわくわく感やドキドキ感を共有しながら、関わりを深めることができ、しだいに保育者を頼ってくる姿が少なくなった。

#### 事例5 『めっきらもっきらどおんどん』 長谷川摂子 作 ふりやなな 画 福音館書店

##### ① 不安定な姿を見せていた5歳9ヶ月 E児の姿

E児は、大人の真似をして難しい言葉を使ったり、一方で赤ちゃん言葉を使って急に駄々をこねたり、情緒が不安定な姿が見られた。E児は、美しい絵が描かれている『にじいろのさかな』や『めっきらもっきらどおんどん』のように怖い中にも好奇心を刺激してくれる絵本が大好きで主体的にお話遊びに加わっていた。

##### ② E児の変容

ある日、E児は、役をめぐって友達とトラブルになり、泣いたり怒ったりしていた。そのことが要因となり、遊びが中断し続きが出来なくなった。読み聞かせをした後に「もんもんびやっこになりたかった」と思いをつぶやいた。その時も、同じ役になりたい友達が数名いたが、以前のようにトラブルにはならずに「一緒にやろう」と言う友達の案を受け入れることができた。「早くお話遊びの続きをして遊びたい」気持ちでE児の心を動かした。

##### ③ 考察

E児は『めっきらもっきらどおんどん』の読み聞かせの中で、不思議な世界観を楽しみ、想像を膨らませていた。絵本を友達と一緒に見たことで、場面を共有し、友達になりたい役が重なってしまった。役をめぐってトラブルになったが、少しずつ相手の気持ちに気付きはじめた。お話遊びでは、同じ役が2人いても楽しいという経験ができた。また、一人ひとりの気持ちや感じ方が違うことがわかり、友達と力を合わせたり、譲り合ったりしないと遊びを楽しめないことに気が付いた。

#### 事例6 『はらぺこあおむし』 エリック・カール作 もりひさし 訳 偕成社

##### ① 絵本は好きであるが、表現においては苦手意識をもつ6歳8ヶ月のF児

『はらぺこあおむし』の絵本を読んだ後に、印象的な場面を友達や保育者に伝え、一番心に残った部分を言った。

##### ② F児が心を動かした場面

小さく痩せたあおむしが、彩り豊かな果物やお菓子を食べるところに心を動かした。

絵本のパンみたいにくるくると太ったさなぎが、パスを使ってカラフルな蝶に生まれ変わったところを描き、自分の言葉で語りながら、青虫が毎日食べていた食べ物の色を表現し蝶の色を塗っていた。集中しながら自分のイメージで描くことができた。

##### ③ 考察

言葉での表現が難しいF児だったが、決して心が動いていないわけではなく、クレパスと紙があることで、頭の中のイメージや映像が紙に写し出されるかのように表現できた。「絵は心の表現」と言われるように想像の世界を「ありえない事」だとわかっていても、どこかで信じ、知っているいろいろな表現手段をつかって友達と共通のストーリーで冒険や探検遊びを楽しむことができる。知らない世界に興味をもったり、子ども同士でも言葉遊びの面白さに目覚めたりしたF児だった。

## 事例7 『はたらくくるま』 伊藤アキラ 作 中川貴雄 絵 ひさかたチャイルド

### ① 特別な支援を必要とする 4歳9ヶ月 G児

G児には情緒面と知的に課題があり、園でも支援計画を作成し、個別に配慮しながら対応していた。多動と聴覚過敏があり、保育室から飛び出してしまうことが多く、こだわりも強く出ていた。

### ② G児の変容

通園途中に、ゴミ清掃車やミキサー車に遭遇すると激しく興味を示し、車を止めて見ていることがよくあった。担当保育者は、保護者からその話を聞き、『はたらくくるま』の絵本を準備した。表紙を見せたり、ページをめくったりすると、絵本を持っている保育者の膝に自分から座ってきた。G児は保育室にいる時間が少しずつ増え『はたらくくるま』の絵本が置いてある一角にG児の居場所ができた。他児とふれあう時間も増えてきた。

### ③ 考察

『はたらくくるま』の絵本があるでG児の気持ちが絵本の方に動き、この絵本が大好きになった。実際に見たミキサー車やごみ清掃車の絵本を見て疑似体験し、大好きな絵本のある場がG児の居場所になった。

## Ⅸ 家庭や地域での子どもの生活と絵本

乳幼児期は、地域の人とのつながりを深め、異世代の人からも昔話やわらべ歌を聞いたり、定期的な絵本ボランティアの読み聞かせを経験したりして絵本にふれる体験が豊かになることが大切である。

### （１）地域の読み聞かせボランティア活動

① こども園では、保護者が読み聞かせの実践をおこなうボランティア組織「クローバー」がある。年度当初は4・5歳児を対象に実践しているが2学期から3歳児、12月より2歳児も仲間入りし、年齢の幅を広げている。夏場は場所を変え、木陰を利用して読み聞かせをしたり、寸劇やパネルシアター・ジャンボ絵本なども活用したりして、集中力を高める工夫をしている。読み聞かせの他に、絵本部屋の壁面環境や本の整理などの活動も行っている。

② 地域住民が主体となり、湖北地域の読み聞かせボランティア組織「jeeーぼこぼこ」があり、小学校や保育園・幼稚園・認定こども園と広く活躍されている。低年齢児向けには、読み聞かせの他に、鈴など音の出るおもちゃを使い、子どもたちの興味を引き付けている。子どもたちは、お祖父ちゃん、お祖母ちゃん方の巧みな話術と温かい雰囲気引き込まれ、集中して絵本の読み聞かせに参加できている。

③ 地域の読み聞かせボランティアの方が、園の教育に参画してくださることは、単に読み聞かせを推進する目的だけではない。子どもが、小学校、中学校、高校と歩いていく中で、地域の大人が地域の子どもの健全な育成をする土台づくりとなる。地域のつながりが希薄化している現代社会の中では、園や学校が核となり、子どもが地域の中で安心して生きていける環境や人とのつながりを築いていくことが求められる。園や学校は、地域の読み聞かせボランティア組織の方と協働しながら、園運営や子育て支援にどのように参画してもらえるか地域と共に歩いていくことが不可欠となる。

## （２）子どもの家庭生活と絵本

- ① 家庭でお父さん、お母さんの膝に座わり、ぬくもりを感じながら絵本を見たり、読み聞かせをしてもらったりする経験が少なくなった。一方では、スマートフォンを使ってゲームや動画を見せ、子どもが電子機器に夢中になっている姿もよく見かける。子どもがいる家庭に絵本が置いている暮らしを目指し、園では、クリスマスプレゼントについても、玩具ではなく絵本を贈ることとし、親子の触れ合いや読み聞かせの大切さの推進に努めた。
- ② 近隣の公立図書館の貸出カードを作成し、園からも定期的に地域の図書館へ行っている。また、家庭からも子どもたちを図書館に連れて行ってもらえるように積極的に働きかけた。休日に家族で図書館に出かけ、児童文学にふれる機会を多くもってもらいたいと考えた。
- ③ 令和５年文部科学省が全国の小学生を対象に、家庭の蔵書数を初めて調査したところ、25冊以下が３割を占めた。一方で蔵書数が多い方が全国学力・学習状況テストの正答率が高くなる傾向があり、国語力だけではなく、それ以外にも同様の結果があり、読書が、理解力や思考力とも結びついていると記載されていた。

## X まとめ

以上の事例や考察から、絵本との関わりを、より効果的に子どもの成長につなげるために、以下の３つのこと提案する。

- ① 単に読み聞かせの回数を増やすのではなく、子どもの個性や発達特性を保育者が理解し、その子にあった絵本を選ぶこと。  
具体的には事例の１で示したように、文字を絵として捉える段階では、擬音が多く載せられ、音として感性に訴えられるものを選んだこと。また、事例５のように、子どもが興味をもっている事柄にあわせた絵本を準備し、絵本に対しても興味をもつように関わりを深めていったことなどが挙げられる。そのためには、対象の子どもの発達の段階を理解することがまず求められるが、すぐにぴったりの絵本が見つかるものではない。保育者は、様々な絵本に接すること、繰り返し読み聞かせの場をもつことが大事である。また、子どもたちの反応をきめ細かく観察し、効果が期待できる絵本を見つけ出す感性も磨いてほしいものである。
- ② 本を通しての保育者とのかかわり方を工夫し、意図的な接し方を行うこと。  
例えば、事例２で示したように、興味ある音を共有したり、関係のある絵を探させたり、クイズのようにあてっこしたりする活動を意図的に準備しておき、絵本の魅力を一層引き出すように仕組むこと。また、事例３のように、絵本の一コマを取り入れてコミュニケーションを図る活動を繰り返し、成長につなげたことなどが挙げられる。  
そのために保育者は、絵本の特徴を十分に理解し、子どもと絵本との出会いや関わりをどのように進めるか創造する力を伸ばすことが求められる。また、園内において、成功事例等の情報交換が定期的に行われるように配慮することが必要である。
- ③ 園での取り組みで効果が見られたことは、家庭・保護者と共有し、同じ歩調で関わりを深める中で、



子どもの成長を促し、みとり、評価していくこと

このことは、事例1、2、3に少し触れているが、子どもだけでなく保護者との関係を深めるアイテムとして、絵本に関する話題は有効といえるからである。その理由は、話題の垣根が低いということ。保護者側から見れば、指導されるという恐怖感がなく、話の中身も具体的でわかりやすいことがある。もう一つは、具体的な子どもの姿で話し合える内容が多く、場合によっては、複数のグループでも共有しやすいことがある。

絵本は、子どもと保育者・保護者の関係性を深める役割を果たしてくれる要素が多く含まれている。事例3にあったように、コミュニケーションの補助教材にもなっている。

絵本の中にある楽しさや不思議さ、自分の興味を満足させてくれる場面は、子どもたちの表現したくなる思い、誰かと共有したくなる思いを高めてくれるものであり、こうした絵本の特長を保育者が理解し活用することで、子どもたちのコミュニケーション力や表現力が向上するといえるのである。

一冊の絵本を通しての成功例は、子どもたちにとっては、人とのかかわりを深めていく過程を確立するための一歩となり、保育者にとっては、今後の保育に応用することのできる貴重な体験となる。

特に、今回の事例の中には、絵本との関わりにおいて、「安心」という情緒面の特長もみられた。事例4においては、絵本を介すことによる安心感が、友達と関わる楽しさにつながり、友達と関わる機会が毎回持てるところにまでつながっている。また、事例6で示は、絵本の世界に出会ったことで、心がうごかされ、活動へのエネルギーが満たされ、前向きに、意欲的に人と関わる活動や表現活動に向かえるようになり、そのことが成長という姿につながっている。

私たちは、絵本の読み聞かせという窓口を閉じることなく、意図的計画的に進め、そこに見られる子どもたちの成長の姿を、地域の方や家庭・保護者の方と共有することで、子どもたちの人格形成の基礎を培うという責務に貢献していきたいものである。

## XI おわりに

本研究を進める中で多くの発見があった。保育者が、発達段階に応じた絵本環境を工夫し、子どもの言葉やつぶやきを受け止めながら観察や記録をとることが、一人ひとりの子どもの思いを理解する手がかりになった。また、事例にも示したが、絵本で見たり、聞いたりした内容を経験と結び付けながら、自分なりの言葉や行動の表出につなげ、主体的な表現意欲が育まれた例が数多く確認できたことは大きな財産となった。

子どもたちは、絵本を通じて、先生や仲間と心を通わせ合いながら、人との関係やコミュニケーション力を高め、ごっこ遊びやお話遊びに発展させていった。集団生活が不安で保育者から離れられなかった子どもが、絵本に出てきた繰り返しの一節を楽しみ、仲間意識や友達関係を深めることができた。絵本がもつ繰り返しの文脈やリズム、絵、色、形、などから見て取り、自分の感情や考えを言葉で表現する力を身に付け、情緒が安定し、将来の生きる力にもつながると感じる子どもも見られた。

絵本は、乳幼児教育の重要な要素であり、子どもたちの成長と発達に深い影響を与えるものである。生涯忘れられない絵本がある大人も多い。子どもの頃に園や学校で経験した読み聞かせの絵本やお話遊びの題材をはっきり記憶している大人もいる。

しかしながら、Xで述べたような課題も見られる。効果を上げる取り組みには、地域のみなさんの理解と協力、職員の前向きな意欲を引き出す職場環境づくりなど、間接的な要素もたくさんあり、事例にあげたような工夫を発展・継続させるとともに、新たな取り組みについても研究を深めていくことが求められ

る。併せて、事例1で紹介した、「A児の母親が『先生！A児に絵本を読んでいると私も楽しくなってきたわ』』といった、保護者からの生の成功体験を数多く発信し、絵本がもつ魅力を広げていきたい。

絵本がもつ魅力や役割を園や家庭、地域で効果的に活用することは、子どもたちの言語能力や社会的スキルを向上させるだけではなく、自己理解や自己表現の能力も高めることは明白である。

これからも、保護者、保育者、養育者、そして社会全体が協働しながら、乳幼児期の子どもの健やかな発達と幸福を支援していきたいものである。

#### 《事例》

2015 年 長浜市立とらひめ認定こども園

2020 年 長浜市たかつき認定こども園

2023 年 長浜市立あざい認定こども園

- ・『いやだいやだ』 せなけいこ 作・絵 福音館書店
- ・『おおかみと7ひきのこやぎ』 原作グリム いもとようこ 文・絵 金の星社
- ・『きんぎょがにげた』 五味太郎 作 福音館書店
- ・『じゃあじゃあびりびり』 赤ちゃん絵本 まついのりこ 作 偕成社
- ・『はたらくくるま』 伊藤アキラ 作 中川貴雄 絵 ひさかたチャイルド
- ・『はらぺこあおむし』 エリック・カール作 もりひさし 訳 偕成社
- ・『めっきらもっきらどおんどん』 長谷川摂子 作 ふりやなな 画 福音館書店

#### 《引用 参考文献》

- ・幼稚園教育要領解説 平成30年3月 文部科学省 株式会社フレーベル館
- ・幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説 平成30年3月 内閣府・文部科学省・厚生労働省 株式会社フレーベル館
- ・無籐 隆 編『育てたい子どもの姿とこれからの保育 ―平成30年施行幼稚園・保育所・認定こども園新要領・指针对応―』 株式会社ぎょうせい
- ・スキヤモンの発達・発育曲線 <http://kasugasoccer.web.fc2>doc>scammon>

古川礼子 長浜市立あざい認定こども園園長 幼児教育学